
終焉の勇者

紫ティンク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終焉の勇者

【コード】

N7859Q

【作者名】

紫ティンク

【あらすじ】

NPCが主人公のVRMMOモノ。

(前書き)

MMO系の小説を読んで影響され、自分でも書いてみました。
はつきり言って駄文です。人によっては不快な思いをさせてしまう
かもしれません。読む際はご注意ください。

「この世界はね、紛い物なんだよ」

茶色がかつた黒髪をオールバックに纏めた、壮年の男がそう言った。彼の名はヴァテスト。俺の両親を殺し、俺を奴隷として飼っている男だ。いや、奴隷というよりは所有物とでも言うべきか。その証拠に、俺は六年前から成長していない。“プレイヤー”の所持品は劣化しないのだ。

「此処は夢の中なのさ。棺桶のような機械の中で眠りにつくと、この仮想世界へとやって来れるんだよ。そう、このヴェルダ임・オンラインの世界の中へとね」

ヴァテストは俺を組み伏せ、穏やかに笑っている。屈託なく、楽しそうに。そのことに腸が煮えくりかえるかのような怒りを覚えた。歯を噛み砕かんばかりに食いしぼり、血が流れかねない程に拳を握りこむ。今は耐える。まだそのときではない。

「全く、ここは素晴らしい世界だよ！ 殆ど現実と変わらない！ まるで本当に異世界に迷い込んでしまったかのようだよ！！ 次世代スーパーコンピュータとやらのおかげだね！！ おかげで今、僕は、こうして君と触れ合うことができる！！ 何でも人の脳を使っているらしいが、まさか世界一つを再現するほどの演算能力があるなんて、当時は夢にも思わなかったものさし！！」

腰をかくかくと揺らしながら、朗々と解説を続けるヴァテスト。コイツが少年愛嗜好を持つ変態だったのは、果たして運が良かったのか悪かったのか。変態だったから俺だけは生かされ、変態だった

故に今俺は犯されている。ああ、でもこの、行為のさなかでの解説癖だけは役に立つ。もうすぐだ。明日、俺は計画を実行する。力を手に入れるのだ。そしてその手に入れた力と、コイツから得た知識を用いて。俺はコイツに、復讐してやるのだ。

「サービス開始から約十年。未だ数千万人も“プレイヤー”がいるのは、他の追隨を許さないほどのこの世界の美しさと、圧倒的な自由度の高さ、そして何より異常なまでのやりこみ要素故、だろうね。……おっと、忘れてたよ。もう一つ、この世界だけの特徴があったのをね。ふふ、全く。人間とは性欲には逆らえない生き物だからね」

感じているかのように嬌声を上げてやる。そうすることでコイツは喜ぶから。生きるために媚を売る自分に吐き気を覚える。下腹部に感じる灼熱感が気持ち悪い。ふいに無性に死にたくなった。今回が最後だと自分に言い聞かせ、自死の衝動を飲み下す。

「それに比べれば、大したデメリットでもないだろうさ。崩壊寸前のゲームバランスや、ストーリーの薄さ、製作者の趣味全開な各システムなんてね。なんだったかな？ 悪魔として成り上がり、魔王を目指そう！ だったかな？ まあ、そもそもこれは、有志によって作られた非正規ソフトなんだしね。スポンサーからして道楽者で有名な人だったら嬉しいし、製作者が趣味にはしっても、それは仕方のないことだろうさ」

腰を振りつつ俺の身体を撫でまわすヴァテスト。それはまるで、蛆虫が身体中を這いまわるかのような嫌悪感。愛しそうに俺を見つめるその視線は、視姦と言つのも生温く。男である俺ですら孕ませそうなほどのおぞましさだった。

「…………おっと。そろそろ仕事の時間か。それじゃ、ラストスパート
といううか。しっかり受け止めるんだよ」

アラームでも鳴ったのか、ヴァテストがペースを上げた。肉を打
つ音とベッドの軋む音が、室内で空虚に木霊する。やがて感じる、
腸内に白濁液を流し込まれる感覚。ああ、やっとこの地獄から解放
される……。

「ふう……。それじゃ、僕は会社に行つて来るから。いつも通り、
いい子にしてるんだよ？ 愛しい愛しい、僕のイーラ」

そう言つて、なんの脈絡もなくヴァテストが消失した。ログアウ
トしたのだろう。俺はそれを確認すると、すぐさま洗面所へと駆け
こんだ。そして、吐き気を堪えることなく胃の中身をぶちまける。
出て来るのは胃液だけ。こうなるのは解りきっていたから、行為の
前は何も食べないことにしているのだ。

やがて落ち着いてくると、魔法を使つて身を清める。結局、慣れ
ることはなかったな……。と、そう思いながら。

時計を見ると、朝の七時だった。計画開始は昼過ぎから。時間ま
だ、充分過ぎるほどにある。まずは身体を休めようと、ベッドの上
へと寝転がり……。べちゃり、という感触に溜息を吐くと、俺はの
たのたと支度を始めた。

クソッ、シーツが汚れてんのを忘れてた……。

遙か前方に天高く聳え立つ、荘厳なる白亜の神殿。少年イーラは、街道脇の木陰に気配を絶ち隠れながら、注意深く神殿の入り口を睨みつける。

その手は緊張のせいか汗で滑り、どくどくと煩いほどに心臓が鼓動する。イーラは硬く硬く握りしめていた剣を地に突き立てると、無造作にズボンの裾で手汗を拭いた。

焦る必要はない。計画は完璧だ。ここからだ。ここから全てをやり直すんだ。今日、ここで、俺は力を手に入れる。弱者から強者へと生まれ変わるんだ。

ゆっくりと、何度も何度も深呼吸を繰り返し、イーラはようやく身体の力を抜くことに成功した。緊張し過ぎてもいいことなどなく焦ったところでメリットなど存在しない。頭ではそうと解っているのに、身体は想いと裏腹に強張っていく。

少しでも落ち着きを取り戻そうと、イーラは計画を反芻することにした。既に幾度も繰り返したことだ。今日だけでも数十回はやっている。しかし、慎重に慎重を期すためにも、やりすぎるといふこともないだろう。そうイーラは結論付けると、自らの計画に想いを馳せた。

ターゲットの名は、《剣神》リュカオン。世界で七人しかいない、超魔王の称号を持つ“プレイヤー”だ。基本的に馬鹿げたパラメータを誇る“プレイヤー”の中でもトップクラスの化物。最強の魔王、超魔王パールを下した生ける伝説。畏怖と崇拜を込めて、《剣神》と呼ばれる存在だ。そのパラメータは最低でも1000億を軽く突破する。

当然、普通に戦ってもイーラに勝ち目はない。イーラの現在のレベルは36。パラメータは多くてもだいたい1200くらいだ。平均的一般人が20程のパラメータしかないこの世界では、実にその六十倍もの強さを持つ。しかし、先にも述べた通りにリユカオンのパラメータは1000億超えだ。ハナクソをぶつけられただけでもオーバーキル。軽く十回は死ねる。

だが、イーラには勝算があつた。情報は既に手の内にあり、必要なアイテムも入手済み。かつて両親を殺した“プレイヤー”に媚びへつらい、膨大なまでの知識を手に入れた。そして、その“プレイヤー”に気付かれないう、こっそりと昼間に男娼で稼いだヘルで買ったレアアイテム。三年だ。全てを揃えるのに三年掛かつた。辛く苦しい、屈辱に塗れた日々だつた。だがそれも、今日で終わりだ。

イーラは左手中指にある、シンプルな銀の指輪を見る。これが今回のキーアイテム。彼がこの襲撃を決意した原因。彼が自らを飼っていた“プレイヤー”から盗み出した、世界にただ一つしか存在しないアイテム、ユニークアイテムだ。名を、先制の指輪と言う。効果は単純にして強力無比。曰く、奇襲に必ず成功する……。

「……っ!」

イーラがそこまで考えたところで、ついに事態が進展した。神殿から一人の男が出てきたのだ。日の光を浴びて輝く銀髪に、宝石の如き紅と青のオッドアイ。不自然なまでに整つた、美しすぎる容姿。動作の一つ一つが妙に素人臭いの、何故か圧倒的なプレッシャーをまき散らしている。それは高位であるほど顕著になる、“プレイヤー”にありがちな“ちくはぐさ”だつた。だからイーラは確信した。間違いない、あれがリユカオンだ、と。

イーラは音もなく三体のコピードールを起動した。レアアイテム『コピードール』。起動した主を完璧に模倣する自動人形だ。ただし稼働時間は三時間が限界で、そのうえ最大HPが1で固定なため、どんな低レベルが相手でも一撃で破壊される。それが三体。イーラが今回のためにと、三年の月日を掛けて手に入れたアイテムだ。

「射程内に入ったらこれを使え。使ったら俺の盾になれ」

そう言っただけイーラはコピードールにマジックハンド状のアイテム、ぶんどりハンドを渡してやる。シーフであるイーラのコピーである以上、盗み損ねる可能性は限りなく低い。しかし、無いわけでもない。そのためイーラは念のためと、一体に三つずつ、ぶんどりハンドを渡してやった。

そして、身を潜めること数分。イーラの隠れる木陰の前を、無防備に通り過ぎるリユカオン。「しっかし、なんで転生がダーマ神殿なんだよ？ それは転職するところだよ？」など呟きながら、たらたらと歩いている。まるつきり隙だらけなその様は、とてもではないが世界でもトップクラスの實力を持つような“プレイヤー”には見えない。しかしそれを見ても、イーラは微塵も油断はしなかった。それは、ヤツら“プレイヤー”が“そういう存在”であると知っているからだ。

異様に高いパラメータ。早すぎる成長。数多のスキルを習得し、有り得ないほど強力な装備品を使いこなす。生きとし生ける者たちを「所詮はデータの塊」と切つて捨て、外道の行いを平気でする。無邪気で残酷な、力だけが異常に強い子供。それがイーラが認識する“プレイヤー”だった。

「付いてこい」

ぼそり、と。囁くように告げ、次いでリュカオンへと駆けだすイーラ。風を切って走る彼に、しかしリュカオンは気付かない。当然だ、先制の指輪の効果はもちろん、本来ここは不戦区域なのだ。襲撃されるなどは、夢にも思わない。

イーラはリュカオンの至近まで近づくと、ぶんどりハンドを使用した。同時に携帯袋の中から一つ、ぶんどりハンド消失する。すると敵の剣が一瞬にして掻き消え、イーラの携帯袋の中へと収納された。突然腰の剣が鞘ごと無くなったことで、リュカオンが動揺を露わにする。そこを突くように、続く三体のコピードールが籠手を、靴を、そしてネックレスを奪い取る。

馬鹿なヤツ。さっさと反撃すればいいのに。ま、もう遅いけど。

ここで反撃され、コピードールを一体破壊されることを覚悟していたイーラだったが、予想に反してリュカオンは棒立ちだった。そのことを内心で嘲笑いつつも、その隙を見逃すことはなく。イーラはすかさずクラススキル『意識を盗む』を発動した。

「チイツ！！！！」

しかし、ここで予想外の事態が発生する、スキルが失敗したのだ。成功率80%のスキルの失敗に、イーラは盛大に舌打ちした。と、そこでようやくハツと我に帰るリュカオン。彼は未だ多少混乱した様子ながらも、手近なコピードールを己が拳で殴りつけた。グシャリ、という盛大な音とともにコピードールが潰される。

もしコピードールへの命令が、盾になれ！ではなく、スキル『

意識を盗む』を使え！ だつたなら。全ては完璧に終わっていただろう。しかし現実はその、上手くいかなかった。考えている間にも、リュカオンは既に二体目を撃破し、こちらへと向かってきている。

クソッ！！ 予想以上に強い！！ 転生直後のレベル1、さらに装備なしでこれかよ！！ どんだけ転生ボーンスもってやる！！！！

イーラは歯噛みした。まずい。攻撃系のスキルでも使われたら、万が一にも勝ち目はない。混乱している今が最後のチャンスだ。イーラは殴りかかってきたリュカオンの拳を奇跡的に躲すと、強引に『意識を盗む』を発動させる。成功。くらり、と傾くりュカオン。それを見たイーラは安堵の溜息を吐き……。

「グオフツ……！！」

最後の力を振り絞ったリュカオンに、鳩尾を蹴り飛ばされた。

「ガアッ……ゲフツゲフツ…カフ……」

蹲り、血を吐くイーラ。真っ赤な血液が、びちゃびちゃと大地に零れ落ちる。

「……く…そ、があ……！！ おいつ！！ 靴を寄越せ！！！！」

コピードールに命じ、イーラは靴を履き替えさせた。ついさつき、リュカオンから盗んだばかりのランク50の装備品、神域の靴。その効果の一つに、HPの自動回復があったことを思い出したからだ。

靴を履きかえ終えた途端、みるみる傷が治っていくイーラ。神域

の靴の回復量は、秒間1%という規格外なものだ。結果、僅か99秒でイーラは全快した。靴を装備したことによって、一気に上昇した最大HPの分までも。

「は……はは……。すごい……。すごいすごい……！！！！
何だコレ！？ 強すぎるだろ……！」

靴だけでこの強さ。これに他の装備を足せばどうなるのか？ イーラは楽しくて楽しくてしょうがなかった。早く他の装備も試して……。いや、リユカオンを完全に無力化するのが先か……。

「おい、すぐに移動するぞ……！ そいつも忘れずにつれて来いよ……！」

イーラは最後に残ったコピードールにそう命じると、スキップでもしそうなほどに軽い足取りで森の奥へと進んで行く。表示されるマップの端の先、マップとマップの間の空間。そこは“プレイヤー”が入ることのできない空間だ。“プレイヤー”はオブジェクトを破壊も素通りもできない。だから、僅かな隙間を残し、木という通過できないオブジェクトに囲まれているそこは、イーラだけの安全領域だ。

そこを目指し歩きながら、イーラはこれからに想いを馳せた。まずはパラメータを全て盗んでやろう。その次はウエポンマスターの習熟度だ。そして最後に、所持金に所持アイテム。どれもこれも今やその全てが俺のものだ。ハンド系アイテムが無くなったら、盗んだヘルで買い足せばいい。だから全ステータスが1になるまで、盗んで盗んで盗んで盗んで盗んで盗んで盗んで盗んで盗んで盗んで盗んで盗みまくってやる……！ そしてヤツに……ヴァテストに、復讐してやる……！！！！

つくに底を突いているであろうSPも、神域の靴のもう一つの効果であるSP自動回復のおかげで、全くもって減る気配すらない。

「……ああ。……やあつつつと、終わったあ……」

やがて日が暮れ始めれ、辺りが暗闇に包まれる頃に至つて。イーラはようやく全ての習熟度を盗み終えた。

「所持金と所持アイテムは携帯袋ごと頂いてあるし……よし！ あとは倉庫のアイテムを頂くだけだな。おい、起きろ！！ いつまで寝てやがる！！」

残念なことにシステム上、倉庫のアイテムは盗むことができない。だからイーラはリュカオンを起こし、倉庫からアイテムを引き出させようとした。無論、素直に引き出すことはないだろうが、そこは脅してやればいい。リュカオンの復帰ポイントは既に割れているのだ。延々と、復帰した瞬間にスタンバらせたコピードールで殺してやる。イーラはそう脅迫するつもりだった。

しかしここで、本日二度目になる予想外の事態が発生する。なかなか目覚めないリュカオンを起こそうと、イーラが彼を軽く蹴りつけると。リュカオンが、まるで大型トラックに跳ねられたかのように、血と肉片をまき散らして数十メートルも吹き飛んだのだ。

「……………はあ？」

イーラは失念していた。この世界においては、物理法則よりもパラメータ補正が優先されるということを。靴とはいえ、高位であればATKも上昇するということを。そして、パラメータを強奪し、さらに装備によって飛躍的に上昇したATKで蹴りつけたなら。例

え軽く蹴っただけであろうと、DEFが1しかないリュカオンがこ
うなるのはもはや必然である、ということ。

ミンチとなったりユカオンの死体が、光の粉をまき散らして消滅
していく。それを見ながら、イーラは後悔した。ああ、復帰ポイン
トに行くのめんどくさいなあ……と。これが原因で滅びへの道をひ
た走ることになるなどと、夢にも思わずに。

《“プレイヤー”によって不当に犯されたNPCが1億人を突破。

“プレイヤー”によって不当に殺されたNPCが10億人を突破。

超魔王バールを倒した“プレイヤー”が5人以上。

プリニールを倒した“プレイヤー”が1人以上。

サービス開始から10年以上経過。

以上の条件が満たされた状態で、尚且つレベル50以下で超魔王
の称号を持つ“プレイヤー”を倒したことにより、称号『勇者』を
取得しました》

ふいにイーラの脳内に響くアウンス。『勇者』。魔王がやたら
と居る世界なのに、誰も得たものが居ない称号。おそらくは在るだ
ろうとされながら、誰も見つけられなかった称号。だから当然、そ
れはイーラが見たことも聞いたこともない称号だった。

《称号『勇者』の取得に伴い、以下のスキルを取得しました。

ユニークスキル『勇者補正』を取得しました。

ユニークスキル『主人公補正』を取得しました。

ユニークスキル『スキルラーニング』を取得しました。

ユニークスキル『装備領域拡大』を取得しました。

ユニークスキル『レベル成長限界突破』を取得しました。

ユニークスキル『状態異常無効』を取得しました。

ユニークスキル『特殊攻撃無効』を取得しました』

さらに続いたアナウンスに、イーラは絶句させられた。ユニークスキル。それは世界中で一人だけしか持つことのできない、その個人の専用スキル。唯一パラメータの絶対的な差を覆せる可能性を持つ、強力無比なスキルのことだ。それが同時に七つも手に入るなど、それはいくらゲームバランスがおかしいこの世界であろうと、あり得ないようなことだった。

だがイーラの驚愕も、次の瞬間には跡形もなく吹き飛んだ。

《勇者の称号を取得した者の出現に伴い、全“プレイヤー”強制参加型EX級難度特殊クエスト『終焉の勇者』を開始します》

いつもなら、頭の中にだけ響き渡るアナウンス。それが今、世界中へと響き渡っている。

「……………難度…EX……………って……………」

……………ええ？」

イーラは呆然と立ち尽くしながらも、どこか諦めに似た心境で確信した。ああ、俺はきつと、関わってはいけないものに関わってしまっただんな……。。

こうして、世界の終わりが始まった。それは、終焉へと続く一本道。

殺さなければ殺される。殺し過ぎれば世界が終わる。

救いなど何処にもない。これは、世界へと捧げられた一人の少年の物語なのだから。

(後書き)

万が一にも人気が出たら続き書く、かも。ないだろうけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7859q/>

終焉の勇者

2011年10月7日02時15分発行